



琉球大学学術リポジトリ

University of the Ryukyus Repository

Title	沖縄の自然環境を活かした国頭地区トータル支援 - 主体的に動き出すための支援 -
Author(s)	久志, 峰之; 大城, 麻紀子; 金城, 明美; 浦崎, 武
Citation	琉球大学教育学部発達支援教育実践センター紀要(4): 97-103
Issue Date	2013-03-31
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/26037
Rights	

沖縄の自然環境を活かした国頭地区トータル支援 —主体的に動き出すための支援—

久志峰之* 大城麻紀子** 金城明美*** 浦崎武****

The Total Support Group in the Kunigami Area in which the Natural Environment of OKINAWA was Employed Efficiently - Support for acting spontaneously -

Takayuki KUSHI* Makiko OSHIRO** Akemi KINJYO*** Takeshi URASAKI****

要 約

トータル支援教室は、年に1度、国頭地区の環境を活かしためぐり合う居場所を設定している。トータル支援の卒業生、学生、国頭地区の児童が参加し、沖縄の自然と触れ合い、かかわり合う。広汎性発達障害の小学校高学年A君、高校生のT君、小学校低学年のS君は、青空の下、カヌー体験で海水を楽しむ。大学生は子どもたちと関わり一緒に遊びを楽しむを共有することで子どもたちは主体的に動き、自分から水に触れ、それぞれの苦手な側面と向き合い、乗り越え、独自の楽しみを生み出すイメージを創り出していった。国頭地区におけるトータル支援教室の場は主体的に動き出す環境のなかで自己を表現する場となった。

1 はじめに

1. 国頭地区で行うトータル支援教室

平成21年、夏。初めてトータル支援教室が、国頭地区で行われた。第1回目は、東村の小中学校での出前トータル支援であった。「紙ひこうき」から湧き起こる遊びを行い、コックピットごっこ、折り紙、まと当て等の遊びが展開した。その後、平成23年度に自然環境・海を活かし海辺の環境で「どろんこ遊び」等が行われた。国頭地区で実施するトータル支援教室は、定例会に参加している児童、支援スタッフ、トータル支援教室の卒業生、現地参加の子どもたちの交流の場になっている。そのような繋がりのあるメンバーたちと海に触れるカヌー体験を含めた国頭地区トータル支援を行った。

平成23年3月の東北大地震後、沖縄の自然環境

は癒しの場として注目されている。ここで、改めて沖縄らしい自然にふれあう子ども達に目を向け、国頭地区トータル支援から見えることを考察していく。

2. トータル支援にみる発達の視点

浦崎ら(2010a, 2010b, 2011)は6年間、トータル支援教室において他者との関係性を基盤とする「誰かと何かを共有する」体験を積むことを目的とした集団支援を実施してきた。他者との関係性の形成による共有経験は、社会性の基盤となる身体、情動、認知、言語、コミュニケーション、自己形成に大きな発達の影響を与える。発達障がい児が他者との快の情動経験が生じる支援姿勢と支援構造を整えるとともに、支援企画を通して他者との関係性の形成への意欲に基づいた共有経験を積むことを目指す。

* Naha Juvenile Classification Homes
** MorikawaSpe. School, Okinawa Pref
*** KubeEle. School, Nago City, Okinawa Pref
**** Faculty of Education, Uni. of the Ryukyus

安心できる重要な他者、安心できる場の雰囲気、共有経験の媒介となる事柄が必要であると考え、集団支援の場においては、共有経験を積むための媒介として毎回、「取り組み（企画）」を設定している。取り組んでいると、気が付いたら集団の場で快の情動を共有しているというような仕掛けや工夫、ついつい夢中になってしまうような支援企画の子どもたちにとっての魅力が必要である。そのためにも対象児の興味・関心を企画に取り込んだり、発達段階に応じて興味を示す支援材料等も用意する。子どもたちを企画へ引き付け、その場において他者へと＜向かう力＞を引き出し、自然に相互作用が展開する支援企画を用意する。

トータル支援教室は子どもの環境・居場所に注目してきた。かかわる側の言葉かけを大切にしながら子どもが触れる素材や環境に注目してきた。今回の国頭支援では、かかわる大人のふるまい、沖縄文化、青い海、国頭地区の自然環境等の設定を活かす工夫をした。沖縄の自然環境を活かし、見るものひとつひとつの瞬間にどんな動きが沸き起こるか注目し、子どもたちがそのような経験をするのかについて着目したい。

国頭地区トータル支援は、トータルを卒業した生徒とのかかわりを含め、個性の子ども達の触れ合いには、自分から主体的に他者へとかかわろうとする子どもたちの姿が見られた。子どもたちの主体的に動き出す行動について記述し、検討する。

II 方法

1. 国頭地区トータル支援者の観察

年に1度の企画として実施した支援記録を分析する。今回は3名の子ども達に絞ってエピソードを分析し、これまでの経過を含め考察していく。子ども達とかかわってきた支援者の立場から、支援記録・ビデオ記録・作品等を掘り起こし、みえてくることをまとめていく。

2. 国頭地区トータル支援の企画について

平成24年度、4回目の金武町ネイチャー未来館での企画名は、「国頭 日帰りキャンプ」である。今回は、集団遊びへ繋がっていくものと沖縄の自然を活かした企画を準備した。企画1では、ボール・縄という道具を使い、集団で体を動かすものを準備した。企画2では、順序良く並ぶルールに参加するすいか割り、企画3では、カヌーに飾るビニール旗作りと青空を仰ぎながら海水に触れるカヌー体験を

企画した（表1）。

平成24年度は、児童6名、トータル支援の卒業生1名、国頭地区小学校から児童2名が参加した。各自、保護者同伴で行った。団長及びスタッフは16名。そのうち学生は5名である。総勢38名による国頭地区トータル支援となった。

3. 国頭地区トータル支援者との打ち合わせ

企画1～3までの内容は、支援者と打ち合わせがなされ、「子ども達と一緒に楽しむこと」を基本として支援方法を確認した（表1）。

表1. 活動内容

活動内容	子どもへの配慮・支援手立て
ボール・縄	担当の子どもに声をかける。
すいか割り	それぞれのペースに合わせて遊ぶ。一緒にルールを守る。
旗づくり カヌー (保護者の準備した宝もの)	海水に浮くカヌーを楽しみながらパドルのタイミングを子どもに合わせてあげる。感想を発表する子の側にいてあげる。拍手をおくり褒める。

4. 参加児童生徒3名の背景

(1) トータル卒業生T君

人と話すことが苦手、オウムがえしで応えることがあった。大人と話すときと安心する。

(2) A君

A君は6年生で、居住地の小学校の特別支援学級に在籍している。小学校では、国語・算数など、少人数のほうが学習効果が高いと思われる教科以外は、登下校を含めて協力学級で過ごしている。父・母・姉・兄・本児の5人家族である。出産時、胎児の心拍数低下のため緊急帝王切開で産まれた。首のすわりは4か月で、1歳1カ月の時に歩き始めた。発語は1歳6か月で、2歳頃まで片言であった。1歳半健診で言葉の遅れが気になり相談したところ、様子を見るために3回ほど地域の親子教室に通ったが、2歳8か月時に転居のため教室をやめた。転居先の3歳児健診では発達の遅れに対しての指摘はなかったが、行きつけの小児科でコミュニケーション面の課題を指摘され、発達専門の医療機関受診を勧められた。3歳7か月時から発達専門の病院(以下Hクリニックと記す)にて療育指導開始。Hクリニックで4歳7か月時に精神遅滞(広汎性発達障害)の診断を受けた。

母親の話では、3歳の保育園入園時の面談で、名前を問われても返答ができなかったようである。幼

稚園在園の6歳ごろまでオウム返しが多く、問われたことに対して適切な返答ができなかったと話していた。また、保育園では、一人遊びが多く、ルールを理解することが難しかったようで、子ども同士のトラブルが多かったようである。そのほか、かんしゃく・耳ふさぎ・通園の道順へのこだわりなどがあった。こうした実態により、保育園、幼稚園共に加配の先生がついていた。

小学校2年生頃まで言葉で意思を伝えることが難しく、友人間の関わりの中で自分の気持ちを思うように伝えられず手が出るなどのトラブルが多かった。学習面は、一斉授業での理解は難しいが、少人数形態にすると時間がかかるが、基礎的な内容を理解することができた。小学校3年生くらいからはルール性のある遊びができるようになっていった。車やヒーロー物が好きで、絵を描きながらよく独り言を言ったり、思い出し笑いをしたりする。手先は器用で絵を描くのが好きである。自分の興味関心のあるもの描いた絵では、細かな所までよく描写していた。ハサミの操作も上手である。その反面、ボディバランスをとるのは苦手である。そのため動的な遊びは好きだが、体をコントロールできず思うように活動できない場面がよくみられた。

4年生の4月よりトータル支援教室の集団支援に参加し、10月からは個別支援もしている。小学校1年の6月の発達検査(WISC-III)では、全IQ57であった。同じ検査を小学校5年の2学期に実施したところ、全IQ77、言語性IQ70、動作性IQ90(言語理解73、知覚統合95、注意記憶79、処理速度66)だった。

(3) S君

S君は、小柄な低学年である。唇の使い方が苦手であり、早口になりがち。絵本や図鑑が好きである。以前は、文字がマスからはみ出すこともあったが、今では、1文を枠内に書ける。

III 支援の経過と考察 (3名の児童生徒)

1. 国頭地区トータル支援参加の子ども

表2に参加した児童・生徒の様子の変容を示す。

2. 卒業生のT君、海水に触れる

①事例・海水

活動の場へ到着し、受付をする際に先にきていた子どもに対して「お先にどうぞ。」など就労支援で覚えたであろう丁寧な言葉遣いをしていた。顔見知りの支援員が声をかけるも始めのうちは

慣れない言葉遣いをしていた。

支援員が寄り添い色々な話をしていくうちに以前のような対応になっていた。「今日カヌーだよね?」とその日の活動内容を楽しみにしているようであったが、カヌー体験は最後のほうで始めは身体を使った遊びだと言うと「できないですよ」と不安気な表情を見せていた。実際ロープで遊ぼうなどの身体を使った遊びが始まると、促しても遊び自体には参加しなかったが、その場へは支援員と一緒にいることができ、そこで支援員との会話を楽しんでいた。頻りに遊びに誘ってみたものの「ボールは危ない」などと言い遊びに参加することはしなかった。

カヌー体験の前に、カヌーに取り付ける旗作りをすると、「シールを全て貼る」と言い一面にシールを貼り付けていた。周りにはほかの支援員にもお願いしていた。カヌー体験が始まると次第にテンションが上がり始める。

支援員の「右、左」の掛け声に合わせてパドルの操作をしていた。カヌーの中に海水が入ってくると、始めはその海水を自らの足に少しかける程度だったが、かぶるように自分に海水をかけ始めた。その際「(自分が)先生、濡れてる?」と海水をかけながら言っていた。「T君、最高だね!楽しいね!」と後ろから声をかけると、大笑いしながら自分に海水をかけていた。途中「お母さんに怒られるかな?車乗れるかな」と心配している言葉を発するも、海水を浴びることは止めなかった。カメラマンを見つけると、カメラマンに向かって海水をかけようとしていた。「カメラはダメ」と支援員が言うと「壊れる?」と言いつつもカメラを認めては水をかけようとしていた。

カヌー体験が終わり、インストラクターに挨拶をする流れになると自ら手を挙げ「今日はあり

表2 児童・生徒の様子の変容

児童生徒	今までの様子	国頭地区トータルの様子
T君 大人とかわる	小5から支援	海という影響 触感の楽しさ
A君 創作活動が好き	小4から支援 こだわりあり 内側の世界 <コピー> ファンタジー	他者を意識する<オリジナル>行動へ イメージへ
S君 発音の練習中	今回のみ 小柄 発音が苦手	カヌー企画 ハーリーをイメージして楽しむ 発声する

がとうございました。」と挨拶をしていた。また、その日の終わりの挨拶をしようと支援員がすると、再度自ら手を挙げ、全体の前に出てきて「これで、楽しいキャンプを終わります。」とお辞儀をしながらまとめを言っていた。

②小考察

身体を使った遊びのときは、無理には参加せずに支援員と会話を楽しむことで、遊びとは違うかたちで関わりを持ち、自ら居心地の良い場所（安心できる場所）をみつけT君なりの参加の仕方を選んでいた。

カヌーに取り付ける旗作りの辺りから隣にいる他の支援員にも手伝ってもらうなど他者を認め、周囲の人へ関心が向きいてきた。

カヌー体験が始まり、自らに海水をかけ出したことは、T君の湧き上がってきた楽しいという気持ちの表現とエネルギーを自分に向けている様子。さらに、その行為が否定されることなく、「楽しいね」と他者に言語化されたことでT君の中にフィードバックされ自己表現となったのではないか。

T君がカメラに海水をかけている様子を見てみると、カメラに向かってふざけながら海水をかけているだけではなく、カメラマンの後ろにいる親しい支援員に向けてふざけているという様子にも見られる。そして、カメラマンや親しい支援員に向かっていたずらをする様子は、自分が楽しんでいることに周りの人も巻き込んで楽しみたいという気持ちの表れではないかと考えられる。

最後にT君は挨拶を自ら進んですることができたが、以前のT君は何かしら自ら発表することや、全体の前に出てくることは苦手であった。しかし、苦手な場へ支援員と一緒に『いる』という自分なりのチャレンジをし、また、シールの貼り付けを思う存分やったことで『やりきる』体験をし、さらにカヌー体験を通して『思いっきり楽しむ』ことで次第に内に向いていた自分の気持ちが外へと開かれていったことで、自ら『発信』するということができるようになったのではないかと考えられる。

2 国頭キャンプが好きなA君

①去年の体験

A君は、去年、初めて国頭キャンプを企画した時から2年続けて参加している。

去年の企画は、バーベキュー、いかだ制作、そして自由に遊べるどろんこクルージングと、どの企画もA君が興味を持ちやすい内容だった。そのため、少し苦手だったどろんこの企画もわずかな時間で慣れて、自分の好きな活動へとつなげて、最後には誰よりもダイナミックに活動していた。

A君は、キャンプから帰る途中、母親に「楽しかった。来年もバーベキューして船を作りたい。」と話していたようだ。

キャンプから1カ月以上後の集団支援の時も自らキャンプの話題に触れ、「どろんこになって綱引きしたね。」と言ったり、箱庭で木を配置しながら、「キャンプの時は、T君がクワガタ持っていたよね。」などと話したりしていた。

②支援者の名前を覚えていた

去年の楽しかった思い出から誰よりも早くキャンプに来たA君は、スタッフを見るなり、自分の担当している学生の名前を次々にあげて、「〇〇はいる?」「△△は来ている?」と聞いてきた。

A君は、自分が名前を上げた学生は参加していないことを知ると少し不安そうな表情を見せたが、自分の個別支援を担当している支援者は来ていると知ると、「□□先生は来ているの?」と言ってうれしそうに笑った。

A君は、1回目のキャンプはもとより、これまでの活動で参加している学生を名指しで聞いてくることはなかったのも、活動内容よりも参加している学生を気にしている発言は新鮮だった。

③なわとび

A君は、バランスを取る動きが苦手なので、他の子どもたち3人と一緒に大縄で跳んだ時、タイミングが合わず、すぐに縄に引っ掛かっていた。それが何度か続くと、一緒に跳んでいた年上の子どもが「ごめん、少し出いてくれる?」と言ったので、A君は跳ぶことを止め、大縄から少し離れた。

しかし、すぐに縄を回す側になり、大縄を回していた。大縄を上手に回していたので、跳んでいた子どもたちは、十回以上楽しく跳ぶことができた。

その後支援者がA君と交代して回す側になったので、A君は、跳んでいた年上の子どもたちと交代して大縄の中に入った。再チャレンジの時には、同じ身長の子と2人だったので、回す側の

タイミングを見ながら4回跳ぶことができた。

④カヌー体験

A君は、以前にカヌーの体験をしたことがあったようで、カヌーに乗る前から早く乗りたいと楽しみにしていた。

しかし、いざ乗ってみると、A君と一緒に乗っていた支援者の漕ぐタイミングがうまく合わず、カヌーは思った方向にはなかなか進まなかった。何度漕いでも思うように進まないカヌーに、A君は、とうとう漕ぐのをやめた。その上、カヌーの中にA君の苦手な海水の汚れや泡、べたべたした海藻などが入ってきたため、A君は、指定された場所に座っていることができず、座席から出て海藻や泡に触れない前のほうに胡坐をかいて座った。前のほうに座るとバランスが悪くカヌーが大きく揺れるので、A君は、座ったままパドルを漕ぐこともせず、顔を吹き抜ける風と周りの景色を眺めて時を過ごしていた。

折り返し点をまわった後、前方に橋が見えた時、支援者が「橋のところで宝探しができるって。」と話しかけると、それまで大人しく座っていたA君が。「宝探し？早くやりたい。」と目を輝かし、ふたたびパドルを握って漕ぎ出した。しかし、やっぱりうまく漕げないので、パドルを漕ぐのはすぐに諦め、また、あぐらの上にパドルを置いてじっと座っていた。だが、「先生、早く端のところに行こう。」と支援者に早く漕ぐよう促し、宝探しを心待ちにしている様子だった。

いよいよ橋のところに来ると、両手を広げ、「僕のと先生のとふたつ取るね。」と言ってふたつの袋に手を伸ばしたが、「取るのはひとつだけだよ。」と支援者が声をかけるとひとつだけ取っていた。宝探しの時のA君は、うれしそうだった。

A君は、カヌーが終わった後の感想発表の時、「橋をくぐったのがうれしかった。」と話していた。

⑤小考察

A君は、人の名前を覚えるのにはあまり興味がないようで、自分に特別関わりのある人以外は名前を覚えていなかった。

トータル支援教室では、接触する機会が多い個別担当の支援者の名前は覚えるが、半年ごとに入れ替わる集団支援の学生の名前や自分以外の子どもの担当者の名前はなかなか覚えなかった。集団支援の時に学生の名前を呼んでも次の活動で同じ学生に「名前なんだっけ？」と聞いてい

たのである。それが6年生の前半から少しずつ変わり始めた。よく顔を合わせ、話をする学生の名前を覚えるようになった。

A君が学生の名前を覚えているとはっきりわかったのが2回目のキャンプの時である。キャンプに自分が知っている学生支援者が参加しているかを聞いたのを見て、A君は、キャンプの活動を楽しむだけでなく、一緒に参加している他者との関わりも楽しみにしていたのだということがわかった。

2年間のA君の活動をふり返って、A君は、2回目のキャンプの企画のどちらも楽しんでた。

1回目のキャンプは、初めて大学の構内を離れた野外活動であったことと、A君が好きな料理や船造り、あまりルールがなく自分がやりたいようにできる企画ばかりだったので、活動が終わっても記憶に残り、何度も再現行動をしたり、家族や支援者に話したりしていた。

2回目のキャンプは、A君の苦手なバランスを取る活動だったり、スイカ割りやサッカー、なわとびといったルールがあり、他者と共同でタイミングを合わせたりする活動であった。

そのため、うまく跳べなかったり、大人しく順番を待つことができななかったり、スイカを割れなかったりと、一見みるとうまく参加できていない様子であった。しかし、その企画のどれもA君は、自分がどうすれば楽しめるのかを考え、自分なりの参加をしていた。

たとえば、なわとびでは跳ぶ側から回す側にまわったり、スイカ割りでは、割るほうではなく、割られたスイカを切ってみんなに配るほうにまわったりしていた。また、カヌーでは、うまく漕げなかったが、宝探しをしたことで、カヌーそのものを楽しめたと後で話しあっていた。

母親の話では、2回目のキャンプの後、A君は、「楽しかったね。」と話してはいたものの、去年のように再現し、何度も話題に出すことはなかった。キャンプから1カ月以上経った後の集団支援の時、支援者がキャンプのことを聞いた時は、「話すのは難しいな。」と言っていた。企画を上げて質問しても、「覚えていない。」と話し、企画の内容や自分の行動も曖昧にしか覚えていなかった。だが、支援者に「キャンプは、去年も今年も楽しかった。」と話し、「来年もカヌーをやりたい。それから、ハーリーもしたいな。」と早くも来年のキャンプに思いをはせていた。

A君にとって、大好きな企画であっても少し苦手な企画であってもキャンプには楽しく参加できたようだった。

3 ハーリーが好きなS君

①大玉サッカーでまねる

サッカーボールは、大きなバランスボール。S君は、そのボールを右足で上から押さえるように止め、指さしをしながら合図をしている。サッカーの試合を作戦しているようなしぐさである。

②すいかを分ける

すいか割りには、周りの誘導の言葉に合わせ、割ることができた。友達の番になると「左、左」と大きな声でアドバイスする。その後、割れたすいかを切り分け、周りにいる人達に配って歩いた。大人、友達と周り、ビデオ撮影している学生にも勧める。

③カヌーでハーリー

カヌーに乗り込んですぐ、S君は、パドルを半分にしたと言ってきた。

「あけみ先生(しゅーしゅ)。1つにした～(い)。2つは、でき～(ん)。」と話してくるが、何のことか分からずにいた金城におかまいなく固定されたパドルをはずし、半分をカヌーに載せ、半分になったパドルを両手に持ち、右側の海水を漕ぎ出した。その様子を見た金城は「ハーリーみたいだな～(笑う) すごい～」と、声をかける。「S君、ハーリーしたことあるの?」と聞くと首を横に振った。金城は、経験ではない動きに驚き「やったことないのに上手だな～」と褒めた。

途中、2つに分けたパドルを1本に繋ぎ、漕ぐ体験をした。S君にとってはパドルが長い。頭の上まで両手をまっすぐ伸ばし、掲げ上げ、次に片方の手を極端に曲げる動きをしてやっとパドルが海水に届く。小柄なS君は、その動きを数回やった後、パドルを2つに分け、ハーリーの動きで漕ぎ出した。

カヌーでのS君は、大きな声が多く、金城への指示が何度も出た。「あけみ先生、もっと はやくこいれ(で)～。あ～ぶ(つ) かる～」といながら、持っているパドルを海水から引き上げる。体を右左にくねらせたかと思うと、急に仰向けになり、後ろの席にいる金城を見る。しばらくは仰向けに青空をながめ、体を起し、パドルをハーリーのように漕いだ。

ちょっと離れた所に他のメンバーのカヌーが

あるが、大きな声に対しての返事はない。金城も小さな声で「ほんとだ。あぶな～い」とつぶやく。S君は大きな声で「もう、ほんとにちゃんとこいで」と金城を指示する。近くにいるカヌーからの返事は聞こえない。帰りは、2人で「ハーエ(イ) ヤ～、ハーエ(イ) ヤ～」の掛け声をする。

橋の下にぶら下がっている宝もの袋を取る時も大喜びで金城を指示する。S君は大きな声で「もう少しこっちこっち、ああ行きすぎ～」とカヌーを漕ぐ金城に指示する。S君は、宝ものを取った後もハーリーごっこが続き、半分のパドルのままゴールする。

④小考察

普段の生活でも、友達と木登りやサッカーをする小柄なS君だが、なかなか他地域の子どもの交流体験がないS君にとって国頭地区トータル支援での体験は楽しいものであったようだ。サッカーをする相手がいれば、スイカを配る相手もいた。体よりも長いパドルを半分にし、ハーリーのように一緒に漕ぐ相手もいた。相手のいる居場所で湧き起こったイメージはサッカーの試合であり、ハーリーであった。

スイカを割った喜びは大きく、その後の配布姿に繋がっている。S君の喜びの表現が自分から配って廻る姿を引き起こしたのだろう。

カヌー準備の段階で半分になっていたパドルを見ているS君。パドルを半分にしたのは、自分の体より長いパドルを使いやすくするためであろう。ところが、パドルを手にした瞬間の持ち方がハーリーに繋がった。これまで見たり聞いたりした経験があるのか、ハーリーのかけ声が生き生きと表出されることに繋がっている。青い海と青い空の下、自分にできるハーリーがうまくいっていることを実感したS君は、カヌーの上で仰向けになり空を眺めて穏やかになった。自然にひたる感覚を味わっている。

S君のハーリーは、地域行事のハーリーに似ている。S君は地域のハーリーを想像したのか自分からパドルをはずした瞬間、S君の主体は、遊びに吸い込まれた。ハーリーごっこ遊びとして表現されている。

その後、地域での友達とのやりとりで使われる言葉を遠慮なく表出させていた。あけみ先生への指示が続く大きな声は、普段の学校ではあまり見られない。興奮したような声に対して、近くにいるはずの他のメンバーは静かにしている。一緒

にいる金城も鎮まるのを待つように小さな声で同意し応えている。自分から出すS君の大きな声は大自然が吸収している。S君の大きな声と言葉は、上唇が動き、顔を大きく動かすことになる。発音するのに苦手な言葉も上唇や顔の動きと共に発声している。喜びの感情が上唇と顔を動かし、喜びの表情となり、発声となっていた。

10月に感想画と文章を描いてもらった。2つの手が海まで伸びる表現が楽しさを感じさせる。「また～やりたいです。」という繰り返しの表現文に楽しかったことが感じられる。

IV 総合考察

主体的に子どもから動き出す姿は、なわとび遊びであったり、青空のもとのカヌー体験、海水遊びであったりした。

T君は、海水を浴びる感触を楽しみ、また、その海水を媒介として周囲の他者も巻き込みながら楽しんだことで、主体がより外へと開かれ、自分から終わりの挨拶をするという苦手なことを行う意欲へと繋がった。A君をみると、他者との関わりによって、主体的な動きが引き出され、型にはまっていた行動が、型を崩した行動へと変化していった。S君は、居場所となる場や企画によってハリーごっこがイメージされ、自分の体に合ったパドル操作や自分に向き合った創造へと繋がった。

トータル支援の活動は、子どもたち本来の姿を大切に、子どもたちが主体的に動き出す行動を尊重しながら企画をすすめる柔軟性を重要視している。

国頭地区における年に1度の自然のなかの支援教室においても、安心できる重要な他者、安心できる場の雰囲気、海・自然のなかでの取り組みが媒介となって他者や外界へ開かれる主体的な動きが見られた。

引用文献

浦崎武 武田喜乃恵 2010a アスペハート Vol.27 『学童期を中心とした社会性のサポートの必要な子どもたちへのグループ支援—トータル支援教室の支援企画‘ツユコレ’の成果から—』 NPO法人アスペ・エルデの会 P28—P36

浦崎武 武田喜乃恵 崎濱朋子 瀬底正栄 大城麻紀子 宮脇絵里子 2010b 遊びを媒介とした他者との関係性と共有に基づく発達障がい児への集団支援 ～支援企画‘みんなのまちをつくって遊ぼう’～ 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要 第2号 P129—P145

浦崎武 武田喜乃恵 宮脇絵里子 瀬底正栄 崎濱朋子 大城麻紀子 2011 発達障がい児への他者との関係性による相互作用が及ぼす集団の場のもつ力の生成過程～集団支援企画‘ペタペタコロコロ うみのせかい’の質的分析～ 琉球大学教育学部附属発達支援教育実践センター紀要 第3号 P101—P117